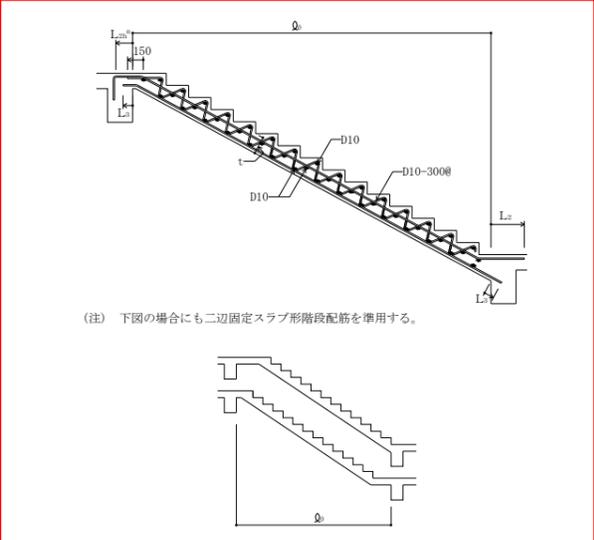
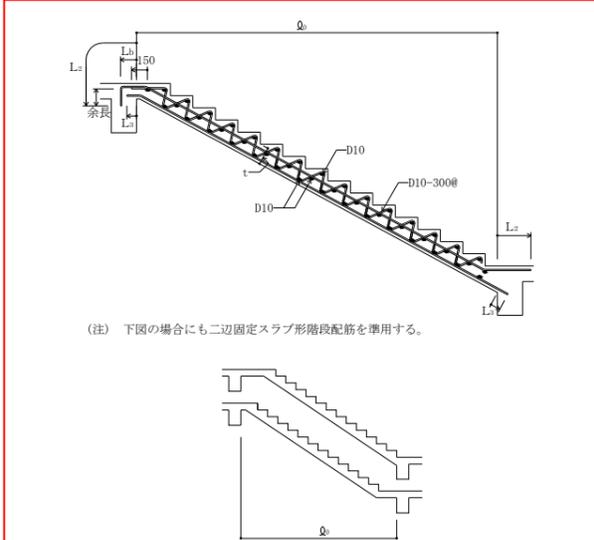


訂正箇所	誤	正
<p>1.2 基礎接合部の補強配筋</p>	<p>図1.3 基礎接合部の補強配筋</p>	<p>図1.3 基礎接合部の補強配筋</p>
<p>1.3 基礎梁主筋の継手、定着及び余長</p>	<p>(b) 独立基礎で基礎梁にスラブが付かない場合の主筋の継手、定着及び余長</p> <p>図1.5 主筋の継手、定着及び余長（その1）</p> <p>(c) 独立基礎で基礎梁にスラブが付く場合の主筋の継手、定着及び余長 ただし、耐圧スラブが付く場合は、(d)による。</p> <p>図1.6 主筋の継手、定着及び余長（その2）</p> <p>(d) 連続基礎及びべた基礎の場合の主筋の継手、定着及び余長</p> <p>図1.7 主筋の継手、定着及び余長（その3）</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>図示のない事項は、3.11による。</li> <li>印は、継手及び余長位置を示す。</li> <li>破線は、柱内定着の場合を示す。</li> <li>L<sub>2a</sub>を確保出来ない場合は、標仕(5.3.4(d)(3))によることができる。</li> </ol>	<p>(b) 独立基礎で基礎梁にスラブが付かない場合の主筋の継手、定着及び余長</p> <p>図1.5 主筋の継手、定着及び余長（その1）</p> <p>(c) 独立基礎で基礎梁にスラブが付く場合の主筋の継手、定着及び余長 ただし、耐圧スラブが付く場合は、(d)による。</p> <p>図1.6 主筋の継手、定着及び余長（その2）</p> <p>(d) 連続基礎及びべた基礎の場合の主筋の継手、定着及び余長</p> <p>図1.7 主筋の継手、定着及び余長（その3）</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>図示のない事項は、3.11による。</li> <li>印は、継手及び余長位置を示す。</li> <li>破線は、柱内定着の場合を示す。</li> <li>L<sub>2a</sub>の数值は原則として柱せいの3/4倍以上とする。</li> </ol>
<p>1.4 基礎梁のあばら筋</p>	<p>図1.8 あばら筋組立の形及びフックの位置</p>	<p>図1.8 あばら筋組立の形及びフックの位置</p>
<p>3.1 大梁主筋の継手、定着及び余長</p>	<p>(b) ハンチのない場合の重ね継手、定着及び余長</p> <p>図3.3 大梁の重ね継手、定着及び余長</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>継手中心位置は次による。 上端筋：中央 Q/2以内 下端筋：柱面より梁せい(D)以上離し、Q/4を加えた範囲以内</li> <li>標仕(5.3.2(b)(2))で定めた鉄筋には、フックを付ける。</li> <li>印は、継手及び余長を示す。</li> <li>破線は、柱内定着の場合を示す。</li> <li>L<sub>2a</sub>を確保出来ない場合は、標仕(5.3.4(d)(3))によることができる。</li> </ol>	<p>(b) ハンチのない場合の重ね継手、定着及び余長</p> <p>図3.3 大梁の重ね継手、定着及び余長</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>継手中心位置は次による。 上端筋：中央 Q/2以内 下端筋：柱面より梁せい(D)以上離し、Q/4を加えた範囲以内</li> <li>標仕(5.3.2(b)(2))で定めた鉄筋には、フックを付ける。</li> <li>印は、継手及び余長を示す。</li> <li>破線は、柱内定着の場合を示す。</li> <li>L<sub>2a</sub>の数值は原則として柱せいの3/4倍以上とする。</li> </ol>

訂正箇所	誤	正
	<p>(c) ハンチのある場合の重ね継手、定着及び余長</p> <p>1. 標仕 (5.3.2(b)(2)) で定めた鉄筋には、フックを付ける。                  2. 印は、継手及び余長を示す。                  3. 梁内定着の端部下端筋が接近するときは、.....のように引き通すことができる。                  4. 破線は、柱内定着の場合を示す。                  ※ <math>L_m</math> を確保出来ない場合は、標仕 (5.3.4(d)(3)) によることができる。</p> <p>図3.4 ハンチのある大梁の定着及び余長</p>	<p>(c) ハンチのある場合の重ね継手、定着及び余長</p> <p>1. 標仕 (5.3.2(b)(2)) で定めた鉄筋には、フックを付ける。                  2. 印は、継手及び余長を示す。                  3. 梁内定着の端部下端筋が接近するときは、.....のように引き通すことができる。                  4. 破線は、柱内定着の場合を示す。                  ※ <math>L_a</math> の数値は原則として柱せいりの3/4倍以上とする。</p> <p>図3.4 ハンチのある大梁の定着及び余長</p>
<p>3.4 小梁主筋の継手、定着及び余長</p>	<p>(a) 連続小梁の場合</p> <p>図3.11 小梁主筋の継手、定着及び余長 (その1)</p> <p>(b) 梁の端部で間隔の異なる場合</p> <p>図3.12 小梁主筋の継手、定着及び余長 (その2)</p> <p>1. 印は、余長位置を示す。                  2. 梁せいが小さく垂直で余長がとれない場合、斜めにしてもよい。                  3. 図示のない事項は、1.3及び3.11に準ずる。                  ※ <math>L_m</math>、<math>L_a</math> を確保出来ない場合は、標仕 (5.3.4(d)(3)) によることができる。</p>	<p>(a) 連続小梁の場合</p> <p>図3.11 小梁主筋の継手、定着及び余長 (その1)</p> <p>(b) 単独小梁の場合</p> <p>図3.12 小梁主筋の継手、定着及び余長 (その2)</p> <p>1. 印は、余長位置を示す。                  2. 梁せいが小さく垂直で余長がとれない場合、斜めにしてもよい。                  3. 図示のない事項は、1.3及び3.11に準ずる。                  ※ <math>L_m</math> を確保出来ない場合は、標仕 (5.3.4(d)(3)) によることができる。</p>
<p>3.5 片持梁主筋の継手、定着及び余長</p>	<p>(a) 先端に小梁のない場合</p> <p>図3.13 片持梁主筋の定着及び余長</p> <p>(b) 先端に小梁がある場合</p> <p>図3.14 片持梁主筋の定着</p> <p>1. 図示のない場合は、(a)による。                  2. 先端小梁終端部の主筋は、片持梁内に水平定着する。                  3. 先端小梁の連続端は、片持梁の先端を貫通する通り筋としてよい。</p>	<p>(a) 先端に小梁のない場合</p> <p>図3.13 片持梁主筋の定着及び余長</p> <p>(b) 先端に小梁がある場合</p> <p>図3.14 片持梁主筋の定着</p> <p>1. 図示のない場合は、(a)による。                  2. 先端小梁終端部の主筋は、片持梁内に水平定着する。                  3. 先端小梁の連続端は、片持梁の先端を貫通する通り筋としてよい。</p>
<p>4.3 壁の交差部及び端部の配筋</p>	<p>図4.2 壁の交差部及び端部の配筋</p>	<p>図4.2 壁の交差部及び端部の配筋</p>

訂正箇所	誤	正
<p>5.2 スラブ筋の定着及び受け筋</p>	<p>図5.2 スラブ筋の定着長さ及び受け筋（その1）</p> <p>図5.3 スラブ筋の定着長さ及び受け筋（その2）</p> <p>※ <math>L_2</math>を確保出来ない場合は、標仕 (5.3.4(d)(3)) によることできる。</p>	<p>図5.2 スラブ筋の定着長さ及び受け筋（その1）</p> <p>図5.3 スラブ筋の定着長さ及び受け筋（その2）</p>
<p>5.3 片持スラブの基準配筋</p>	<p>図5.4 片持スラブの配筋（CS1からCS5）</p> <p>図5.5 片持スラブの配筋（CS6及びCS7）</p> <p>1. 先端の折り曲げ長さLは、スラブ厚よりかぶり厚さを除いた長さとする。 2. スラブに段差のない場合は、主筋を引き通してスラブに定着してもよい。</p>	<p>図5.4 片持スラブの配筋（CS1からCS5）</p> <p>図5.5 片持スラブの配筋（CS6及びCS7）</p> <p>1. 先端の折り曲げ長さLは、スラブ厚よりかぶり厚さを除いた長さとする。 2. スラブに段差のない場合は、主筋を引き通してスラブに定着してもよい。</p>
<p>5.6 出隅部及び入隅部の補強</p>	<p>(b) 片持ちスラブの出隅部</p> <p>図5.9 片持ちスラブ出隅部の補強配筋</p> <p>(注) 1. <math>Q_1 \geq Q_2</math>とする 2. 出隅受け部配筋は柱又は梁にL<sub>1</sub>定着する。</p>	<p>(b) 片持ちスラブの出隅部</p> <p>図5.9 片持ちスラブ出隅部の補強配筋</p> <p>(注) 1. <math>Q_1 \geq Q_2</math>とする 2. 出隅受け部配筋は柱又は梁にL<sub>1</sub>定着する。</p>
<p>6.2 二辺固定スラブ形階段の基準配筋</p>	<p>図6.2 二辺固定スラブ形階段配筋（その1）</p>	<p>図6.2 二辺固定スラブ形階段配筋（その1）</p>

訂正箇所	誤	正
	 <p>(注) 下図の場合にも二辺固定スラブ形階段配筋を準用する。</p> <p>図6.3 二辺固定スラブ形階段配筋（その2）</p> <p>※ <math>L_2</math>を確保出来ない場合は、標仕(5.3.4(d)(3))によることができる。</p>	 <p>(注) 下図の場合にも二辺固定スラブ形階段配筋を準用する。</p> <p>図6.3 二辺固定スラブ形階段配筋（その2）</p>
<p>7.1 梁貫通孔及びその他の配筋</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 梁貫通孔補強筋の名称等は、図7.1による。</li> <li>(2) 孔の径は、梁せいの1/3以下とし、孔が円形でない場合はこれの外接円とする。</li> <li>(3) 孔の上下方向の位置は梁せい中心付近とし、梁中央部下端は梁下端より1/3Dの範囲には設けてはならない。</li> <li>(4) 孔は、柱面から原則として、1.5D（Dは梁せい）以上離す。ただし、基礎梁及び壁付帯梁は除く。</li> <li>(5) 孔が並列する場合の中心間隔は、孔の径の平均値の3倍以上とする。</li> <li>(6) 縦筋及び上下縦筋は、あばら筋の形に配筋する。</li> <li>(7) 補強筋は、主筋の内側とする。また、鉄筋の定着長さは、図7.2による。</li> <li>(8) 孔の径が梁せいの1/10以下、かつ、150mm未満のものは、鉄筋を緩やかに曲げることで、開口部を避けて配筋出来る場合は、補強を省略することができる。</li> <li>(9) 溶接金網の余長は1格子以上とし、突出しは10mm以上とする。</li> <li>(10) 溶接金網の貫通孔部分には、鉄筋 1-13φのリング筋を取り付ける。なお、リング筋は、溶接金網に4箇所以上溶接する。</li> <li>(11) 溶接金網の割付け始点は、横筋ではあばら筋の下側とし、縦筋では貫通孔の中心とする。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 梁貫通孔補強筋の名称等は、図7.1による。</li> <li>(2) 孔の径は、梁せいの1/3以下とし、孔が円形でない場合はこれの外接円とする。</li> <li>(3) 孔の上下方向の位置は梁せい中心付近とし、梁中央部下端は梁下端よりD/3（Dは梁せい）の範囲には設けてはならない。</li> <li>(4) 孔は、柱面から原則として、1.5D以上離す。ただし、基礎梁及び壁付帯梁は除く。</li> <li>(5) 孔が並列する場合の中心間隔は、孔の径の平均値の3倍以上とする。</li> <li>(6) 縦筋及び上下縦筋は、あばら筋の形に配筋する。</li> <li>(7) 補強筋は、主筋の内側とする。また、鉄筋の定着長さは、図7.2による。</li> <li>(8) 孔の径が梁せいの1/10以下、かつ、150mm未満のものは、鉄筋を緩やかに曲げることで、開口部を避けて配筋出来る場合は、補強を省略することができる。</li> <li>(9) 溶接金網の余長は1格子以上とし、突出しは10mm以上とする。</li> <li>(10) 溶接金網の貫通孔部分には、鉄筋 1-13φのリング筋を取り付ける。なお、リング筋は、溶接金網に4箇所以上溶接する。</li> <li>(11) 溶接金網の割付け始点は、横筋ではあばら筋の下側とし、縦筋では貫通孔の中心とする。</li> </ol>